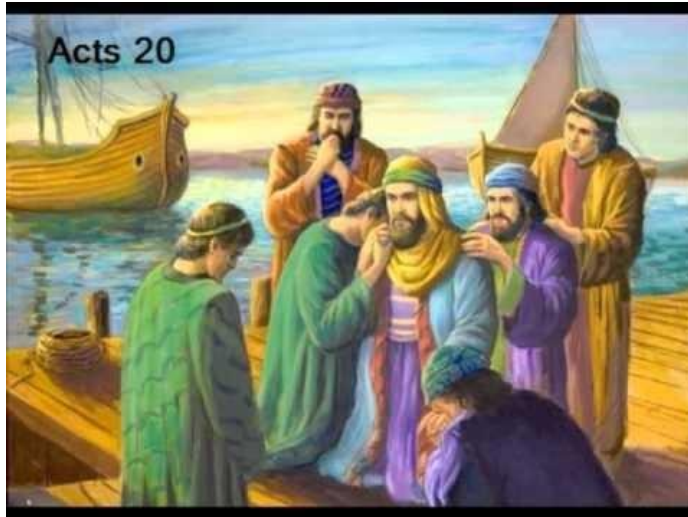


2024年4月14日 説教「走るべき行程」

使徒の働き 20章 22～30節

エペソの長老たちをミレトに呼びだし、パウロは語りました。先週学びましたように、冒頭では「謙遜の限りを尽くし」仕えてきたことを伝えました。



### 1. 走るべき行程を走り終え (22～24節)

①心縛られて (22)「いま私は、心縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。」

御霊に促されて、パウロはエルサレムに行こうとしていました。今いるところはミレトですが、彼にはこれから行こうとしている地で何が起こるかがまったくわかりませんでした。

②聖霊のあかし (23)「ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。」

ただパウロにはわかっていることがありました。それは、彼には投獄されることと、苦難とが待ち受けているということでした。それは、どの町にいた時にも、聖霊によって示されていたことでした。

③任務を果たし終え (24)「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるのなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

与えられた使命(ミッション)をパウロは「走るべき行程」にたとえて、走り尽くすことを願っています。また、そのミッションについては、イエスから与えられたもので、「神の恵みの福音をあかしする任務」と言い換えています。そして、その任務を果たし終えるためなら、自分の地上の命を使うことを惜しいとは思わないというのです。

### 2. 神のご計画の全体を (25～27節)

①もう二度と (25)「皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています。」

パウロはエペソの長老達に訣別の言葉を伝えています。エペソの人々は、パウロの顔を二度と見ることがないと語っています。そうなるだろうことをパウロは予測していました。エルサレムを訪問した後は、ローマにも行くよう導かれていたのですから。

②パウロの宣言 (26)「ですから、私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。」

パウロはここで宣言しています。何かというと、エペソの人々で福音を聞いて信じた人々、あるいは求めた人々、あるいは信じなかった人々が、キリストから離れてさばきを受けるなどということがあったとしても、それは自分の責任ではないと彼は言うのです。ここまで断言するのは、彼には

それなりの確信があったからです。

③余すところなく (27)「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」

それはウロには、エペソの人々に創造主である神の恵みのご計画、福音の全体について、イエス・キリストの教えのすべてを、何から何まで伝えたことと確信できたからです。それほどにエペソの地では、力を込めて伝道したのです。

3. 神の教会を牧させるために (28～30 節)

①群れの全体に気を配り (28)「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神ご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」

パウロはエペソの長老達に訴えかけました。彼らに伝えたことは、第一に自分自身と群れの全体に気を配ることでした。気を配るというのは一人一人の魂の状態、置かれている状況、健康のことなどに関心を持つことです。そして、パウロは彼らを群れの監督に任命しているのです。教会での御言葉の宣教、牧会の働きをするように、主の権威をもって、伝えているのです。パウロはそれらが、聖霊によって促されたことで、キリストの流された血潮に基づくものであることを伝えています。

②狂暴な狼が (29)「私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを私は知っています。」

パウロには予想できることがありました。それは、自分たちがエルサレムに向かって出発した後に、狂暴な狼がエペソの教会の中に入り込んでくるということです。それは、身体に危害をもたらすこともさることながら、霊的な揺さぶりが最も危険だと言っているのです。狼はキリスト信仰、福音に対する否定的な情報、正しくない教えなどを群れの中に巧みに働きかけるのです。

③曲がったことを (30)「あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分の方に引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」

そして、クリスチャンの中からも、様々な正しくないことを語る人が出てくるだろうとも注意します。その人達は他の信者たちを、自分の考えに引きこもうとするということです。それは群れがあれば、当然のようにして生じる問題であり、パウロはいくつもそのような例をみてきたことでしょう。

《結論》

パウロの書簡のなかでは、テモテへの手紙第二は弟子テモテへの牧会書簡ですが、その 4 章は遺言ともとれる言葉が表されています。パウロは、テモテに伝道者としての務めを果たすことを促した後に、「私が世を去る時はすでにきました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通し

ました。」(6～7 節)と述べています。それでは、彼はどうして、これほどまでに世を去る時を伝えているのでしょうか。はっきりとしていることは、6 節冒頭に「私は今や注ぎの供え物となります」と述べていることです。これは殉教を意味した言葉です。パウロはこの書簡を記したとき、ローマの獄中にいましたが、外的な迫害による死が意識されることは確かですし、健康面においても、もはや長くないとも感じていたのかもしれませんが。

使徒 20 章の時期は少し前になりますが、「なわめと苦しみが私を待っている」(23 節)と述べて、パウロは患難、迫害が必ず来ることを覚悟しています。エルサレムに行き、その後にはローマへの道があることも示されていましたが、大試練が待ち受けていることも受け入れていました。テモテの書簡には、その通り実現していることが記されています。

テモテ第二書簡とエペソの長老たちへのメッセージの中味には、共通している言葉遣いがあります。それは「走るべき行程」という言葉で、テモテ書では「走るべき道のり」とありました。人生や宣教生涯をマラソン(長距離走)にたとえているといえましょう。テモテの方では、死を目の前にして、「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」とほぼやり遂げたと述べていますが、こちらでは「走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるのなら、私のいのちは少しも惜しいものとは思いません。」(24 節)と述べています。マラソンのゴールが見えてきて、最後の行程を進みながら、福音宣教の任務(ミッション)を果たし終えるために、遺された走行に命をかけていることがわかります。パウロが証してきたのは「恵みの福音」であり、これこそ何にも代えがたい宝なのだとの確信しているのです。

仕事場で働かれている人達にとっては、与えられた課題を果たすことが任務でしょう。その任務を全うするためには必死でありましょう。家庭で働く方々、学校で学ぶ者達にとっても、それぞれの任務があります。しかし、クリスチャンにはもう一つの任務があることを忘れてはなりません。たとえば、キリストは言われました。「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」(ヨハネ 15:5)また、「互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ 13:14)……。主の御言葉を行うことはクリスチャンにとってのいわば任務です。ただ人によって、御言葉が、心のなかで響き方が違うでしょう。「みことばを宣べ伝えなさい」と言われて、それに献身する人もあれば、側面で支えようとする者もあるでしょう。でも、その人に与えられた志が任務です。もう引退されましたが、大阪の交野教会の小形先生は積水化学の部長さんでした。40 数年前に、家を開放して、開拓伝道を始める志が与えられました。当時は長老教会全体が開拓伝道の時代で、ともかく牧師の指導の下に始め、定年後は牧師となって続けられました。今は児玉先生が牧師として引き継いでいます。小形先生にとってはそれを任務と受け取れたのです。岩田姉のように、終生教会に連なることを任務とされる方もいます。それぞれに主から務めが与えられていきます。その務めを全うすることができますように。